

問師教學の一考察

——特に教判説について——

佛教學科淨土學專攻

甫里定信

聖聞上人の教學は隨他扶宗の教説といわれているごとく、二祖三代の教學の單なる祖述にとどまらず、二祖三代の教説中より、その時代に適應した教義を開顯したのである。従つて、その教義及思想内容は、二祖三代の風格といささかその趣を異にして、二祖三代の未顯の點を論及されているのである。従つて、聖聞の教判についても、法然上人の選擇集に説く聖淨二門判によらずして、新たに二藏二教の教判をもつて、淨土宗の教判として新淨土宗義を組織されたのである。

問師が、法然上人の聖淨二門判によらずして、二藏二教の教判によられるには深い理由が存在する。即ち、問師の時代は、禪宗特に臨濟禪の全盛時代であつて、康安年中には、五山十刹の住院年紀が定められ、天龍寺、南禪寺等の禪寺の建立となり、更に當時の社會の中心たる武士階級はうに及ばず、足利幕府及び朝廷も又、これに保護をあたえ、禪風が當時の佛教界を風靡した時であつた。

この時期の淨土宗は良忠門下六派の分裂の後を受けて、宗勢振わず、わずかに法灯を護持している程度であつた。かかる状

態であつたからして禪宗より種々の批判を加えられ、かの南禪寺の虎關の如きは「元亨釋書」卷第二十七諸宗志の中で三論、唯識・律・華嚴・天台・密・禪の七宗は日本現在の宗旨といふものであると斷じ、それ以外の俱舍、成實と淨土の三宗はこれを講ずるものがあつても宗派としての命脈がないとして、國の附庸國に譬え寓宗と稱して獨立の一派としての存在を認めていない。特に淨土は傳灯の統系がないから寓宗であると評している。この虎關の元亨釋書は問師の出生以前に著わされたものであるが、問師と同時代の天龍寺の夢窓疎石の如きは、夢中間答に於て、淨土宗をもつて大乘でなく小乗であり、難行であると非難しているのである。

かかる時に問師が出世して、淨土宗獨立の價値を顯彰すべく生涯の努力を傾けたのである。その結果、淨土宗の傳燈を明すために傳法制度を確立し、更に二藏二教二頓説を組織して、淨土宗の大乘であること及び相頓であつて易行であることを強調されたのである。淨土教も頓漸二教を以て一代佛佛教の中に位置づけることは聖聞に初まるのではなく、法然、聖光兩上人にも見られるところである。即ち、宗祖法然上人は「選擇集」に二門判を用いて淨土宗の教判を明し、「無量壽經釋」にも二教判を窺い知ることができる。即ち、

(1) 天台眞言皆名二頓教然彼斷惑証理故猶是漸教也明二未斷惑凡夫直出三過三界之長夜者偏是此教故以此教爲頓中之頓一也、

とあり、これは宗祖が善導の二教判の意味をおしひろめてあら

たに頓教を頓中の漸と頓中の頓とに分けて、淨土宗をもつて頓中の頓として淨土の教法の深勝性を表わしている。ここに宗祖が二教判を淨土の教判として組織立てようとされた意趣を窺い知るのである。

更に第二祖聖光は「淨土宗要集」に淨土宗をもつて頓教一乘として、その教法の深勝なることを論述している。

かように窺つてくると、阇師の教判はあながち彼の獨創ということはできない。宗祖や二祖に於て二門判と共に二教判が重視され、聖阇以前に二教判が組織されつつあつたと思われる。

阇師の二藏二教二頓判は、善導の二藏二教に立脚し菩提流支の作と傳える。「麒麟聖財論」により成立したのである。では、善導の二藏二教とはいかなるものか、善導は、

(2) 今此觀經即以觀佛三昧爲_レ宗、亦以念佛三昧爲_レ宗、一心回願往生淨土爲_レ體、言教大小問曰、此經二藏之中何藏攝二教之中何教收答曰、今此觀經菩薩藏收頓教攝、

といい、觀經を中心として、二藏二教の教判を立てられている。しかし、かかる教判の名稱は、善導以前にすでに存在したものであるが、善導はこの觀經について二教判を立てたということは單なる一經の位置づけでなく、彼の淨土教の佛教諸法門における地位を示されたものと見ることが出来る。しかしこの教判は、一宗の教判としては、完全に整理されたものであるとはいえないのであつて、これは、教法の優勝性を示さんとするものであつて、完全な教判と云うことは出来ない。しかし、阇師は、この教判を更に詳細に分類し、組織付けることによつて

獨立せる一宗の教判として整理されたのである。しかし、阇師の教判の分類形式並に、その内容は善導のそれに、菩提流支の作といわれている麒麟聖財論の説を加味することにより成立したのである。阇師は二藏義略頌に⁽³⁾

雜行易行是二道

聖道淨土是二門

聲聞菩薩是二藏

一代教門此攝盡

聲聞藏中有三乘

聲聞緣覺及菩薩——中略

菩薩藏中有二漸頓

漸教有_二二初後分

初分教中有二十地

開則亦爲三十地——中略

頓教之中亦有_二二

性相兩頓理事別

性頓立位借_二後分

三賢十地假名立——中略

上來小乘初後頓

今時難證行道

此土入聖聖道門——中略——往生無生淨土門

佞力秘術佛意教

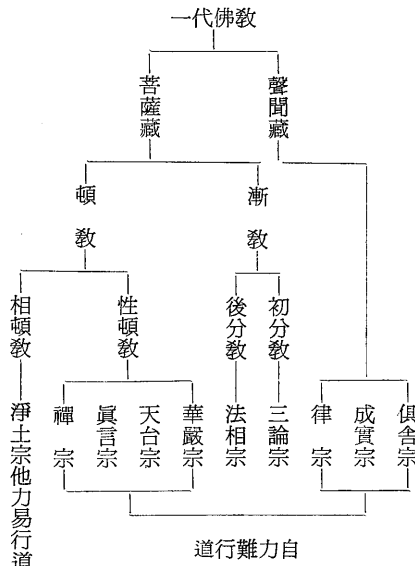
即相不浪頓中頓

と標して、二藏二教の教判を細説されている。

いう處の聲聞藏とは、小乘にして、俱舍、成實、律等に當り、次に、菩薩藏とは、大乘にして、是の中に又、漸教の初分教とは大乘の初教、三乘の共學の教にして三論宗がこれに相當する。後分教は大乘の後教、漸教中の、最是甚深故云後分、界内獨菩薩のみの教で、法相宗がこれに相當する。而して初分教と後分教とは相異する點は、多々あるが、ともに位を経て、漸次佛道を成ずるが故に、同じく漸教の中に攝せられるのである。これに反して、頓教は、次第階位を借らずして、頓速に涅槃を證する法門をいう。この頓教の中の性頓教とは又理事ともい

い、華天密禪の教義であつて、唯理唯性を悟る實大乘を指し、相頓教は又、事頓といつて、事理縱横、即相不返の諸宗統攝最極の法門であつて、淨土宗の説く教えであり究竟の圖教であると論するのである。

今聖闍上人の教判を圖示するならば、



となる。

問師が、この二藏二教の教判を組織された所以は、一に淨土宗が諸宗に超勝せることを明さんがためであるから、諸宗即ち、華嚴、眞言、天台、禪宗の性頓と、淨土宗の相頓との比較、勝劣、同異について、力説されている。

まず問師は、小乗及び漸教並に性頓は、ともに自力此土入聖得果の法にして、今時末法に於ては難證であるから、聖道門難

行道といひ、相頓は、淨土門易行道にして、罪惡生死の凡夫も彌陀の本願力に乘ずれば、淨土に往生し、直に無生を證することが出る。それで、これを頓中頓教と名づけ、末法今時における、時機相應の教は、この教に限るとして、淨土宗頓教の超勝せることをあかし、更に、

(4) 答彼雖言無二會レ心明レ色雖レ談ニ離レ性融レ相理談即理ニ事修ニ相行。今此相頓終窮極談濟凡秘術、直立ニ方域即無方域、正假ニ色相即ニ無色相、無レ行ニ無ニ而悟ニ色心於一法、不レ解ニ不離ニ而開ニ性相於一心。不レ改ニ見生當體ニ之凡夫不レ覺轉ニ入無生本際、不レ斷ニ煩惱迷本之衆生立地證ニ得涅槃常樂、以ニ有相心ニ契ニ無相悟、以ニ事相行ニ入ニ實相門、事中得レ理、理中施レ事、理事縱横自在無礙。佛願開ニ發此功ニ凡愚合ニ會彼位。但安ニ相名ニ爲レ顯レ超ニ過唯理唯性之教ニ也、據レ實而論理事縱横頓中頓也

と述べて、性頓は色心無二、性相不離、理事無礙といへども、なお心に會して、色を明し、性に歸して相を融し、事には相行を修するに對して、淨土他力の教は、有相の心をもつて、無相の悟にかなひ、事相の行をもつて、實相の門に入る法にして、理事縱横なるが故に、諸宗に超過せるものであるといひ。更に(5) 如(禪宗ニ也遠排ニ本無煩惱之霧高升ニ元是菩提臺是以爲ニ性頓、且任ニ其性頓ニ而不離ニ物機解知、故未レ及ニ即相不思議宗。と述べて、特に禪宗に對して、淨土頓教の勝れることを明している。まず勝劣について、

(6) 直成隔時相對時聖道頓勝淨土頓劣也、若斷惑未斷惑相對時聖

道頓猶許斷惑^二故頓中漸也、淨土頓更不^二斷惑^一故頓中頓也といひ、この理由を大原問答、選擇集、安樂集に依つて明している。まず聖道の直成の頓は淨土の偏時の頓に勝ると雖も、直成頓煩惱質礙必須捨報⁽⁷⁾といひ、終隔時道不行也これに對して、淨土の頓は隔時の頓なるが如く見ゆれども、何隔時非或現世證^二無生^一、或即身得往生^一、故に淨土の頓が勝れる（大原問答といひ、次に、直成頓破成^二隔時^一教門アレトモ未斷惑頓壞成^二斷惑教門無^一之、サレバ互相取有勝劣^二直成隔時勝劣破易云^二必須捨報^一故斷惑未斷惑勝劣壞難云^二不斷煩惱^一是二重勝、といひ、聖道の頓は破れて、隔時となる教門なるも、淨土の未斷惑の頓は、破れて斷惑となることがないから、淨土の頓勝る（選擇集）といひ、更に、況彼頓悟頓自力難行故雖談^二頓悟^一頓悟者少、此頓生頓作力易行故如談^二頓生^一頓生者多（中略）南北任^二人意^一是三重勝とのべ、聖道の頓悟の頓は自力難行なるが故に、往生を得る者少く、淨土の頓生の頓は他力易行なるが故に、往生を得る者多い。故に淨土の頓が勝れる（安樂集）と三重勝をあげて論じている。又聖道の頓と淨土の頓との同異勝を論じて淨土の頓が超勝が超勝する所以を論じている。依つて阇師はこの性相二頓を結論して、

(11) 性頓機情一乘故待^二解會^一如、相頓佛意一乘故不^レ待^二解會^一自爾如也、機情一乘帶^二調機^一故還不^レ超^二格^一、佛意一乘開^二弘願^一故超而亦超、

と述べて、性頓は機情悟解、自力の教であり、淨土宗相頓のみ

は、機の悟解を待たざる佛意一乘、他力の教にして、一切佛教中最も勝れた頓中頓であるとして論ずるのである。

要するに阇師は、華天密禪の性頓は、教は速疾なるも機根に堪があるからなお難證のそしりを免れず、今時末法、不機愚鈍のものは、その器ものに非ずして、ただ、淨土頓中頓、即相不退理事縱横、不斷煩惱得涅槃の極地たる佛意一乘の淨土門こそ、諸宗に超勝せる大法門であると論ずるのである。

阇師のかかる教學に對して、江戸時代中葉の大玄等の復古學者によつて、漸く批判がされるに至つた。大玄は、淨土義探玄鈔三卷を撰し、鸞緯導空辨然の義にあらずして、隨他扶宗の善巧説、捏造説に外ならないと論じているが、必ずしも隨他扶宗の爲の善巧説とのみ見る要はなからう。

かかる考えは、今なお續き、阇師教學に對する態度は、依然として、隨他の教學として手輕く取扱うものと、二祖三代の教學と同様に重視するものとの二派に分れている。

思うに大玄は隨他の爲の善巧説を論じ、又これと同趣意の宗教學者も少なくはないが、しかし阇師教學が成立するまでには由漸があり、又阇師自身が明記している如く、淨土祖師の説を依憑として説かれたところが多いが、今は紙幅の關係で割愛するが、阇師教學に見られる獨自の主張を、單なる阇師の獨創であり、淨土列祖の綱格を無視した教學、隨他扶宗的教學とのみ見なして、阇師の教學に包まれる眞義を見落してはならない。阇師の教學の主張の多くは、二祖三代の教學中に求め得るのであつて、阇師は決して列祖の綱格を無視したものでなく、むしろ

ろその時代に適應する教義を開顯、組織、強調、布衍したものであつて、所謂鸞緯導空辨然諸師の思想内容を更に深く掘下げたものが陀師教學であり、時機に契える教學であるから、あくまでも淨土教義の本質に立脚する所説として重要視し、依馮とせねばならないのではなからうか。

註

- (1) 無量經釋第一 (淨全九の三二四～五頁)
 (2) 觀經玄義分 (淨全二の三頁)
 (3) 淨土二藏二教略頌 (淨全十二の一～五頁)
 (4) 頌 義第十一 (淨全十二の一六上頁)
 (5) 集疑同決集 (淨全十二の八四九頁)
 (6) 教相十八通 (淨全十二の七四五頁)
 (7) 〃 (淨全十二の七四五頁上～下)
 (8) 教相十八通 (淨全十二の七四五頁)
 (9) 〃 (淨全十二の 〃 下頁)
 (10) 〃 (淨全十二の 〃)
 (11) 頌 義第三〇 (淨全十二の三四二頁)

行動問題児とその家庭機能について

社會福祉學科社會福祉學專攻

藤 堂 良 純

あいかわらず、少年非行の問題が世間の注目を集めています。あるときは恐ろしいあるときは悲しい少年少女の非行が、毎日のように新聞の社會面を暗くしています。それをみて「健全なおとな」たちは、「今どきの若いものは……と」マユをひそめますが「正常な子ども」でもふとしたことがきっかけとなつて、容易に非行の仲間入りをするという事實を忘れがちです。それが「正常」と「非行」の微妙なわかれ道にたたされた少年少女を、私たちの手のとどこかぬところへ追いやつているのかも知れません。

「家庭で、未つ子の私は、あまえて育ちました。父も母も、そして義兄や姉たちもみんな親切でしたが、だれも私をしきつてくれなかつた。思春期になつた私には、それがすごく寂しかつた。そして、私のいうことはなにも聞かず、親の愛ばかりをおしつける大人の態度に疑問を感じた。なぜ私の心を理解してくれなかつたか？ なぜ私をしきつてくれなかつたのか……」A子(十七)